

通信「ちえふる」

令和元年10月10日発行

読書は学力を支えるかぎ

秋の夜長は読書。というとか優雅な時間を思い浮かべ、テストや受験で夜な夜な勉強に勤しむ人たちにとってはどこか他所の話のように聞こえますが、ちょっと待ってください。実は読書には様々な効用があり、敢えて読書の時間をつくるということは、決して勉強にとって時間の無駄ではないのです。今回はこの読書について書いてみたいと思います。

① 読書は必要か

2017年のある新聞に、「大学生の一日の読書時間0分が5割になった」という記事がありました。この背景には、「読書は勉強には関係ないから時間の無駄だ」とか「読書は趣味の一つだから、生きていくうえで別に必要はない」といった考えを持つ人がいるのだそうですが、本当にそうでしょうか。今皆さんが学校で勉強していることは、もちろん生活に直接役立つこともありますが、最終的には、仕事や生活の中で起こる様々な問題を解決処理するための能力を養うためにあります。そうしたことから、今求められている学力は、知識量や技能だけでなく、思考力、判断力、創造力など、場面場面で臨機応変に応用したり活用したりできる力です。小6や中3の時に受ける全国学力調査で昨年度ま

で出題されていた、いわゆるB問題などがそれにあたります。

② 考える力を身につける読書

今は情報ツールの発達で、必要な情報が瞬時に数限りなく手に入る便利な時代になりました。実は、このことが自分の頭で考える力を奪っているのです。なぜなら、考えなくとも様々なところから容易に答えを導き出すことができるからです。こうしたことから、生きていくうえで必要な問題解決能力が低下しているとさえ言われています。このような考える力を養うには、読書がとても効果的なのです。

③ 読書と学力の関係

どのようなジャンルの本であれ、読書を通して、知識や知恵、想像力、知的好奇心、感受性など、目には見えない様々な力や感覚が養われます。そうした力がより効果的に養われる読書法は、考えながら読むことです。字面を追うだけでなく、共感や反論、疑問や感情移入、推測や想像などを伴うことによって、考える力や感性が高まり、それが生きてはたらく学力に反映されていきます。また、読書を続けることで、集中力や語彙力、文章構成力等が身に付くなどの副産物が生まれます。

繰り返しますが、読書は時間の無駄ではありません。難しいものでもありません。自分の好きなジャンルの本から楽しんで読めばよいのです。

『死ぬほど読書』という面白いタイトルの本があるのですが、この本の中でも読書と勉強との関係が述べられています。興味のある方はぜひ一読を。何はともあれ、読書の秋を機会に、本と向き合う時間を意図的につくってみてはいかがでしょうか。